

巻頭言

陸水研究の巻終言にしないために

三田村 緒佐武

ここでの言は、我が陸水研究人生を総括して、新たにあるべき学者へと進化すべく決意したときからの論考である。私は、理科系の研究者がしばしば陥る「科学は冷たくて暗い」に満足してきた。学者としての基本的資質である「学問を何故するのか」、そして「学問を誰のためにするのか」を真摯に思考し社会の中で行動に移すその両輪を駆動させることができなかった。しかし、世界の湖沼・河川の構造と機能の多様性と、その水域生態系に共存して人類が文明・文化を創造してきたありさまを巡検・研究する機会を得、これまでの私の陸水研究観は「これでよかったのか」と、疑問を抱くようになり現在に至る。私は、約 50 年の研究期間を要しても、「研究者」から「学者」に進化できなかった。

本論考の中心は「科学研究」としての「陸水科学」ではない。それは「学」としての「陸水学」、さらには「心」を修養する「陸水心学」への展望である。私は、しばしば「学問を何故するのか」を自問し、その解を「次世代の人が生きる夢を得るためである」とした。そして、「学問を誰のためにするのか」には、土地に根ざして智慧を育む公平・公正なる次世代の世界住民のために学問をしなければならないとした。そのためには、研究者と学者とを区別し、彼らが学問形成へいかに貢献したかを厳しく論じる必要があるとした。

私たち陸水学を学ぶ者にとって名論とされるフォーブスの論文 (Forbes, 1887) にあるように、湖はそれ自体一つの小さな世界、いわゆる「小宇宙」を構成しており、湖内の生物は、彼らに関わるすべての要素が互いに働きかけあって成育・生息している。したがって、湖におけるある生物種の動態を理解するためには、その生物種のみならず焦点をあてるのではなく、他種との関係、湖からの影響の程度、そして、その生物種がいかに湖に影響を及ぼしているかを明らかにする必要がある。このフォー

ブスの「小宇宙としての湖」の概念は、厳密には正しいとは考えられていない。それは、フォーブスは、湖を閉鎖系としているが、現代の陸水学研究者は、流出河川を持つ開放湖を河川水系の一時たまりと診るのはいうまでもなく、流出河川を持たない閉塞湖も湖外の生物あるいは環境因子との関わりにおいて湖内の生物群集が成育・生息すると考えるからである。さらには、地球上の水循環の中で湖沼を位置づけるべきとの思考学派は、フォーブスのいう「総合湖沼学＝総合陸水学」の概念は、陸水学を研究する者の心構えとすべきと主張する。

すなわち、私たちが、湖沼を時間軸を考慮せず二次元あるいは三次元的に研究する場合においても、個別科学の視点で湖沼を診るのではなく、陸水学の基点となる湖沼を一つの「場」とする「総合陸水学」の視点から湖沼を理解して、場としての湖沼を構成する物理、化学、生物的要素等の動態を解明しなければならないことを示している。しかし、近年、陸水学を支える基礎科学の分化と測定技術の進展に伴い、陸水学の研究手法が細分化し、陸水学の基点ともいべき湖沼を場と診る総合陸水学の視点が失われた。現状の湖沼研究は、湖沼を対象とした「個別湖沼学＝個別陸水学」が多い。さらには、陸水研究者の多くは、湖沼動態の時空間瞬時に観測・調査していることに気づかず、「湖沼は誕生から一生を閉じるまで四次元的にそれ自体がいわば生命体である」との基礎概念で太陽系の中の地球系の中の湖沼生態系における物質とエネルギーの動態として診る認識が欠如している。また、近年の人為的湖沼改変などの環境研究に対しても、「湖沼それ自体が生命体」であり、湖沼環境の現況を総合的に診断しなければならない環境観も醸成できない。これは、いわゆる閉鎖系湖沼のみならず開放系河川の地表水系、ならびに地下水系、さらには地球における水循環系の中に陸水を位置づけるにおいても

「総合陸水学」の基点に戻って、場の構造と機能を学究する必要があることを示している。いいかえれば、総合陸水学の研究・実践が、個別陸水学者が陥った時間軸が直線的「開発」思考を、時間軸が輪廻的「循環」思考へと正常化させることが可能になる。すなわち、陸水研究者は「陸水学とは何か」、「陸水学をなぜ研究するのか」、そして「陸水学を誰のために研究するのか」を研究の原点にしなければ、陸水「研究」は陸水「学」として成立しない。そして、この視点が、「陸水学」から、陸水を心で修養する学問の「陸水心学」へと進化させるための基点になることを心に留めておく必要がある。

学者へと進化することを志す研究者は、「学問を何故するのか」、そして「学問を誰のためにするのか」を常に自問しつつ「学」を究明しなければならない。「学者」とは、何人からの影響をも受けずに真実を発現できる能力を有し、かつ真実の発現に命を捧げて生涯を生きる者である。そして、「心学者」とは、心の修練を行い利他精神で人と草木に対して憐れみを抱く者とする（三田村、2015）。この究極の学問「心学」を新たに構築しなければ、次世代へ継承すべき人類種の保存責務の哲学が失われてしまうように思われてならない。いいかえれば、心学に基づく人の生き方を実践することが、人類種が与えられた種の存続期間を持続させ、真の持続可能社会を構築することが可能になる。混沌とした現世こそ、早急に学者の域を超える心学者が現れることを期したい。ある詩人がいう「科学は冷たくて暗い」は、まさに今の科学を言い当てているようだ。私たち、陸水学に深く関わる者は、「学問を何故するのか」、「学問を誰のためにするのか」を心に深く刻む必要がある。「陸水心学」の実現により、「科学は暖かく明るい」の夢を次世代の孫子に与えてくれるに違いない。

学徒が研究者から学者を志すために、陸水学の規範となる真の論文は日本に存在するのであろうか。そもそも歴史ある論文は、その時の事実に基づき陸水学に関する論考が展開され陸水学「論」が述べられていた。しかし、昨今の論文の多くは、論点に乏しく、先行研究に沿った観測・実験結果の羅列に終始している。このことは、日本に陸水学の師がいるかの視点から、陸水学界を担う若い学徒が育つか否かを考えなければならない。学会が主催する学会大会（研究発表会などともいう）は、発表者が研究者から学者へと進化できる登竜門である。学会大会が、学問を真摯に討論すべき場であるとする学会は、参加者が利害を有せず、何人からも影響を受けないよう、学会組織のみで運営することを原則として、後援団体を列挙することを避けている。さらに、自由参加が原則

の学会大会では、研究発表と十分な討論（いわゆる一般講演の原型）を行うことが基本であり、主催者が企画するシンポジウムや課題講演に大会期間を大きく割くことを止めるべきと主張する。また、学会主催の基調講演は、当該学問の基本を示す講演と参加者に誤解を与えるため、控えるべきとする学会組織もある。近畿支部会が、研究発表会開催の目標の一つを、会の参加者が研究者から学者へと進化する場と位置づけるならば、これら他学会が発信する自律の言を深く受けとめる必要がある。さらに、多くの学会大会の現状は、演者が参加者に観測・実験で得た現象の断片を一方向的に報告するのみで、大会に参加した参加者とともに、研究成果に奥深く内在する哲学・思想を論議して、演者と参加者の自らが研鑽することを怠っている。すなわち、学会組織が、研究発表とそれに対する批判的自由討論から、研究者から学者に進化させる場を提供することを自ら放棄しているとは考えすぎであろうか。

本論考が「陸水研究」の巻終言にならないために、近畿支部会の会員同志が歩むべき道を述べたい。近畿支部会会員は、「学会は民から乖離し、象牙の塔におさまり民を見放した」に真摯に答える必要がある。人のみならず生きとし生ける草木との共生地球を創造したいという熱い住民の陸水学習・活動に答えるため、近畿支部会は組織内改組し「陸水学習住民活動部」を早急に設立しなければならない。そして、この陸水学習住民活動部を通して、陸水学観を有する会員が彼ら住民に溶け込み、ともに学び、育ち、活動したい。近畿支部会は、陸水に興味・関心のある住民に組織の壁を薄く低くすることにより、支部会会員は彼らとともに「陸水学」と「陸水心学」を学び、これを実践可能にする学会に成長できると信じたい。その道程の一つとして、近畿支部会の規約に記されている「陸水学の進歩と普及を図る」の目的を現実化させるため、規約の「陸水学の普及活動の事業を行なう」の普及活動事業に対して、下記の事業計画（素案）を2010年度に提案した。

1) 近畿支部会が陸水研究者を中心として開催している定期研究発表会を、住民参加型の発表会に改める。そのため、新たに「陸水学習住民活動部」を設け、会則変更する。会員は会員A（近畿支部会の運営に関与する会員）、会員B（近畿支部会の運営に参加できないが、会の趣旨に賛同する会員）の2種類とする。すべての会員は、近畿支部会が発行する会誌等に投稿し、配布を受けることができる。また、会が主催する研究発表会、陸水談話会などに出席して意見を述べることができる。会員Aは、近畿支部会の事業・運営に関し、総会に出席して意見を

述べ、議決に参加することができる。また、会の役員を選出し、役員に選任されることができる。なお、会員 A からは会費を徴収するが、会員 B からは会費を徴収しない。会が主催する諸活動の通信は電子媒体を用いて行う。したがって、会員 A ならびに会員 B は、通信可能なメールアドレスの提出により、会員資格が与えられ、情報提供を受けることができる。

2) 陸水学の普及活動事業として、近畿陸水講座「陸水巡検」と「陸水談話会」を設ける。「陸水巡検」は、湖沼、河川などにおいて陸水学あるいは水環境に関わるテーマで年間約 1 回の巡検を行う。陸水巡検は、身近な陸水の有識者は専門家と住民の双方であり、学会活動は住民とともに歩むことが基本であることを、会員自らが再認識するための実践活動であることを趣旨とする。例えば、陸水巡検に参加する住民とともに、湖沼や河川に成育・生息する生物調査、パックテストによる水質汚濁調査などを主活動とした場の特性を明らかにする総合陸水学的調査活動がある。「陸水談話会」では、年間 3 回程度の講演会を公開で開催する。陸水談話会の趣旨は、「なぜ陸水研究を行うのか」、「誰のために陸水研究を行うのか」を参加住民とともに考え、参加者自らが陸水学の有識賢者になり、陸水「学」、そして陸水「心学」を志す学徒の基点に戻り、私たちを新たな日本陸水学会近畿支部会会員へと進化させるためである。話題提供者の講師は、広く陸水学に関わる科学的あるいは哲学的テーマで、近畿支部会の会員、会員外の学識者、あるいは新設の「陸水学習住民活動部」の活動者などである。陸水談話会においては、例えば、演者による陸水環境問題の話題提供に対して、対話・懇話会形式で参加者すべてにより、人間社会では「こちらを立てれば、あちらが立たず」を認識し、孫子世代にまでおよぶ陸水のあり方を深く心学的討論するなどが考えられる。

3) 住民に開かれた近畿支部会の機関誌を発行する。事業計画(素案)では、有為の近畿支部会員(会員 A と会員 B)すべてが投稿を可能にするため、現在の陸水研究の執筆要領(投稿規定)に記されている「原著論文、総説、短報、調査・報告、学位論文抄録、支部会研究発表会講演要旨、雑報、その他」のみならず、「論説、資料、陸水巡検記録、雑感、その他」も投稿規定に含めた。なお、著者の独創性を尊重して査読を経ない校閲のみの編集を可能にすることを目指した。これは、住民生活の知恵と活動で得た陸水研究は、先行研究の有無にとらわれる必要がないものが多々あること、また、歴史に残されるべき優れた陸水研究成果を、査読制度が埋没させ

るおそれがあるためである。しかし、現在発刊されている「陸水研究」は、諸般の事情があり困難とも考えられるが、素案の発刊目標が充分達成されているとはいえない。陸水の構造と機能の真実を解明し、何人の影響をも受けずに発現すべき使命をもつ学者集団組織としての近畿支部会にとっては、陸水に興味・関心ある志高いすべての住民に、開かれた学会からの情報発信は、会を存続させる生命線といえる。なぜならば、陸水に関わる研究は、土地に根ざした住民生活の知恵で得た貴重な事実を含むことがしばしばあるからである。なお、自由投稿で開かれた機関誌を目指すべきとの批判的総括を述べている私は、近畿支部会機関誌「陸水研究」の編集委員長からの依頼により悩みつつその依頼を受け、巻頭言をここに記している。まさに自己矛盾にはかならずの内省記である。

上記 3 点の事業計画の中には、実施困難の理由が多々あると思うが、近畿支部会現会員が「陸水研究者」から「陸水学者」へ、そして「陸水心学者」へと進化するために、住民とともにこれらの道の扉を開けるために命ぜられた私たち会員の維新的事業と考える。私たち近畿支部会会員の責務は、陸水学と陸水心学の素養を住民とともに習得した共同体の一員として、次世代の世界を担う孫子に託す「持続可能な生命総体のための研究と教育」の作業に参画することである。あらゆる組織の壁を壊し、公平・公正なる社会を構築するという究極の目標に向かった近畿支部会会員の活動成果は、言葉で発現できない山川草木の代弁者として、自然の摂理に従った陸水環境の中で共生の規範を示してくれるであろう。この大志を獲得した近畿支部会共同体からの発信が、真の陸水学の一つを構築するに違いない。

最後に、上記の「陸水研究の巻終言にしないために」は、近畿支部会組織と支部会会員に対する批判総括文である。けっして非難文でない。近未来における近畿支部会組織の終焉を防ぐため、日本陸水学会近畿支部会のすべての会員が、文意を心に深く刻み、陸水学者、さらには陸水心学者に進化されることを切に願いたい。

引用文献

- Forbes, S. A. (1887): The Lake as a Microcosm. *Bulletin of the Scientific Association (Peoria IL)*, 77-87. (reprinted, *Natural History Survey Bulletin*, 15: 537-550, 1925.)
三田村緒佐武 (2015) : 環境心学を志すための環境教育. *Psyche*. 72-85.